

(24)

氏名(生年月日)	李 志 成
本 籍	
学位の種類	医学博士
学位授与の番号	乙第776号
学位授与の日付	昭和61年9月19日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	十二指腸潰瘍穿孔の臨床病理学的検討
論文審査委員	(主査)教授 織畑 秀夫 (副査)教授 羽生富士夫, 教授 阿部 和枝

論文内容の要旨

目的

十二指腸潰瘍穿孔の発生論についてはまだ不明の点が多く、その手術々式も施設によりまちまちである。著者は、穿孔十二指腸潰瘍を、急性潰瘍と慢性潰瘍の立場から、その臨床所見および病理学的所見を観察し、その発生および治療などについて検討した。

方法

昭和53年11月より昭和58年10月までの5年間に、当教室で経験した115例の十二指腸潰瘍穿孔例について、臨床記録から、年齢、性別、穿孔前症状、十二指腸潰瘍の既往歴、誘因、基礎疾患などを調査した。また、その切除標本にヘマトキシリン・エオジン染色、エラスチカ・ワンギーソン染色を施し鏡検し、穿孔潰瘍壁の浸出・壊死層、肉芽層、漿膜層の3層構造から、十二指腸潰瘍穿孔を急性型、亜急性型、慢性型の3型に分類し、さらに、再生性所見や血管変化などを観察し、臨床所見と病理学的所見を対比検討した。

成績および結論

- 1) 十二指腸潰瘍穿孔は20~30歳台に多く、男女比は8.6:1であった。
- 2) 誘因としては種々のものがあるが、喫煙習慣がほとんどの例にみられる他、精神的過労・精神的ストレスが多かった。
- 3) 十二指腸潰瘍穿孔は、急激な潰瘍形成からそのまま穿孔に変わった急性型、慢性潰瘍に穿孔が加わった慢性型、およびその中間型の亜急性型と組織学的に3型に分類された。
- 4) 穿孔前症状は59.1%の患者に、また、十二指腸潰瘍

瘍の既往は34.8%の患者に認められたが、穿孔前症状の有無や期間、および十二指腸潰瘍の既往といった臨床経過は、必ずしも穿孔潰瘍の組織型と合致しなかった。

5) 潰瘍壁の層構造や再生性所見を検討すると、穿孔潰瘍には急激な組織の脱落をうかがわせる所見が認められ、穿孔という病態には、通常の潰瘍化とは別の要因が関与している可能性が示唆された。

6) 十二指腸潰瘍穿孔患者には、背景に循環障害を起こしやすい状況や誘因が存在し、また潰瘍周囲には種々の血管変化が認められ、穿孔の要因の一つとして循環障害の関与が示唆された。また、その中で、経過の急激な穿孔潰瘍では細動脈の牽縮による機能的な、また、経過の緩慢な穿孔潰瘍では狭窄性動脈硬化による器質的な血流の低下状態が認められた。

7) 発生論から、十二指腸潰瘍穿孔の治療にあたり、組織型の考慮が望ましいが、臨床経過から組織型は適確には推定出来なかった。

8) 十二指腸潰瘍穿孔患者には、十二指腸潰瘍の既往や、不定の消化器症状を有するものも多く、そのほとんどの例は十分な治療を受けておらず、穿孔に対する認識と予防が必要である。

論文審査の要旨

十二指腸潰瘍穿孔の発生論については、いまだ不明の点が多く、その手術々式も施設によりまちまちである。

そこで著者は、115例の十二指腸潰瘍穿孔例について臨床記録および病理所見を検討し、急性、亜急性および慢性の3型を分類し、種々の背景因子のあることを明らかにしたもので、学術上価値あるものと認める。

主論文公表誌

十二指腸潰瘍穿孔の臨床病理学的検討

東京女子医科大学雑誌 第56巻 第6号
502～514頁（昭和61年6月25日発行）

副論文公表誌

- 1) 臍仮性嚢胞内出血の1例
外科診療 24 (3) 371～374 (1982)
- 2) 肝損傷の検討
外科診療 25 (8) 1020～1023 (1983)
- 3) Contaminationに係わるカテーテル感染症の検討—Multi Vitamin Concentrateを用いて
外科と代謝・栄養 17 (2) 116～119 (1983)

- 4) 著明な低蛋白血症と絨毛状発育を呈した広範囲
I + IIa 集簇型早期癌の1例
臨床外科 36 (6) 999～1001 (1981)
- 5) “peri-anal oedema”を伴った回腸・結腸クローン病の2例
日消外会誌 15 (8) 1408～1413 (1982)
- 6) 胃穿孔の臨床的問題，特に発生の背景と外科治療の適応についての検討
日臨外会誌 45 (11) 1403～1411 (1984)